

再臨のキリストによる  
第3福音書

ヘルメスの杖・下

—大錬金術—

*THE GOSPEL  
BY CHRIST OF*

*THE SECOND COMING No. 3*

*CADUCEUS second volume*

IV

SEIDOU

SEIDON

正道



# 目次

ヘルメスの杖・下	
第3福音書 . . . . .	3
座標 10 ルベド . . . . .	4
全体の目次 . . . . .	7
第1章 クレアーティオ・エクス・ニヒロ	
(1) 賢者の石 . . . . .	11
(2) 虚無からの存在の創造 . . . . .	15
(3) 時空的な創造神 . . . . .	18
(4) 偉大なものは単純である . . . . .	23
第2章 ジェネシス (創世記)	
(1) 創世記の冒頭 . . . . .	27
(2) エデンの園 . . . . .	30
(3) 両性具有の男性原理 . . . . .	35
第3章 暁の太陽の真理	
(1) 第一質量とルベド . . . . .	41
(2) 神との同一本質 . . . . .	43
(3) 色彩の変化 . . . . .	46



ヘルメスの杖・下



## 第3福音書

再臨のキリストによる  
第3福音書

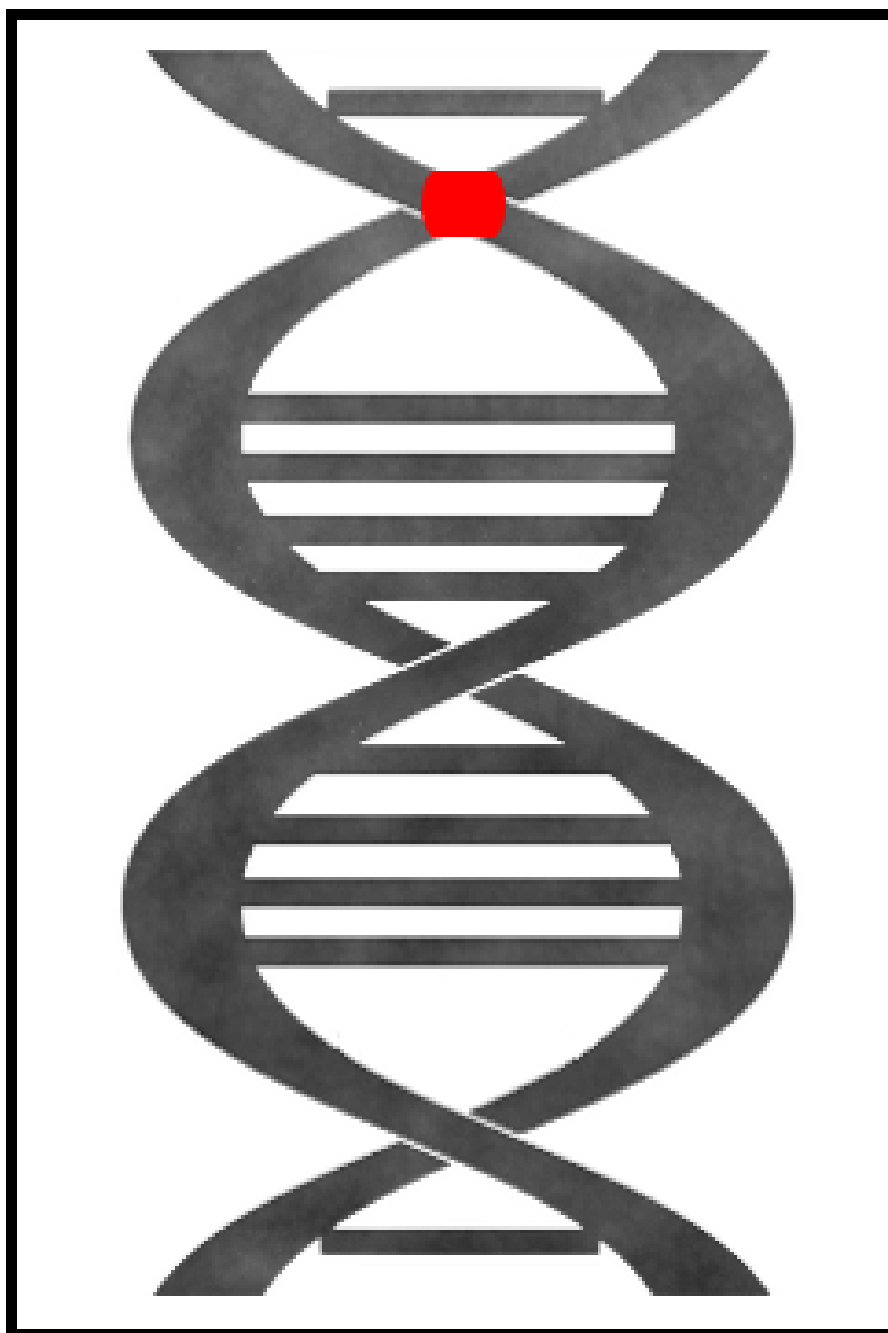
ヘルメスの杖・下

——大錬金術

死の支配は終わった、いまやかの息子が支配するのだ、彼は赤い衣をまとう、かの息子は緋の衣を着て、王座に登るのだ——ヘルメス・トリスメギストス

ユング『心理学と錬金術』池田紘一・鎌田道生訳より

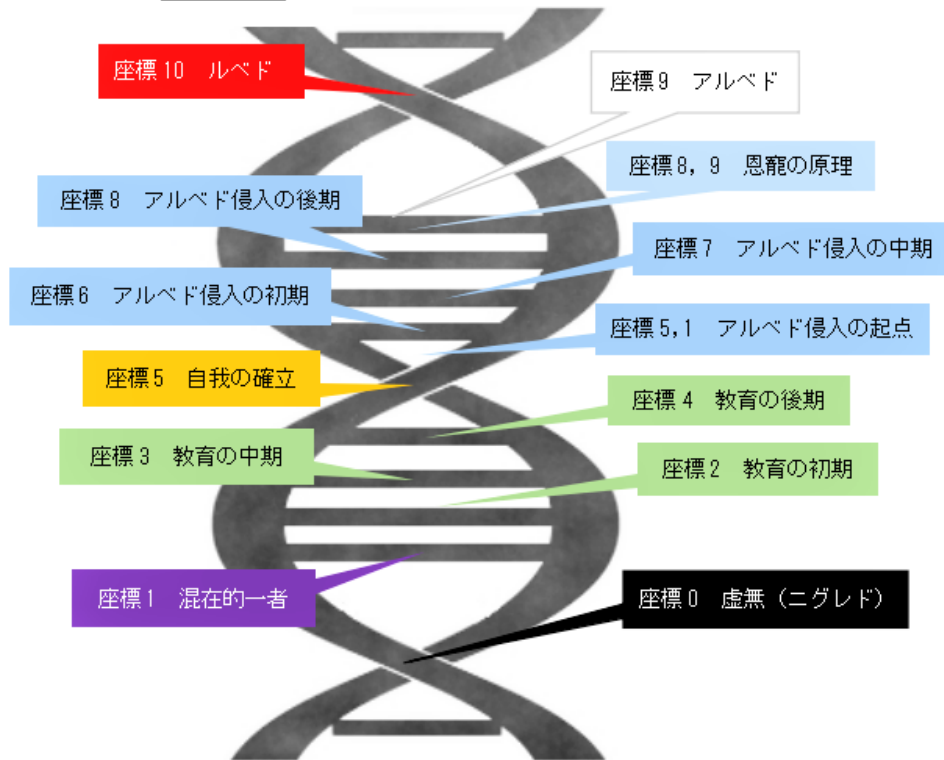
座標 10 ルベド



2022-12-06 \ (7 \).png

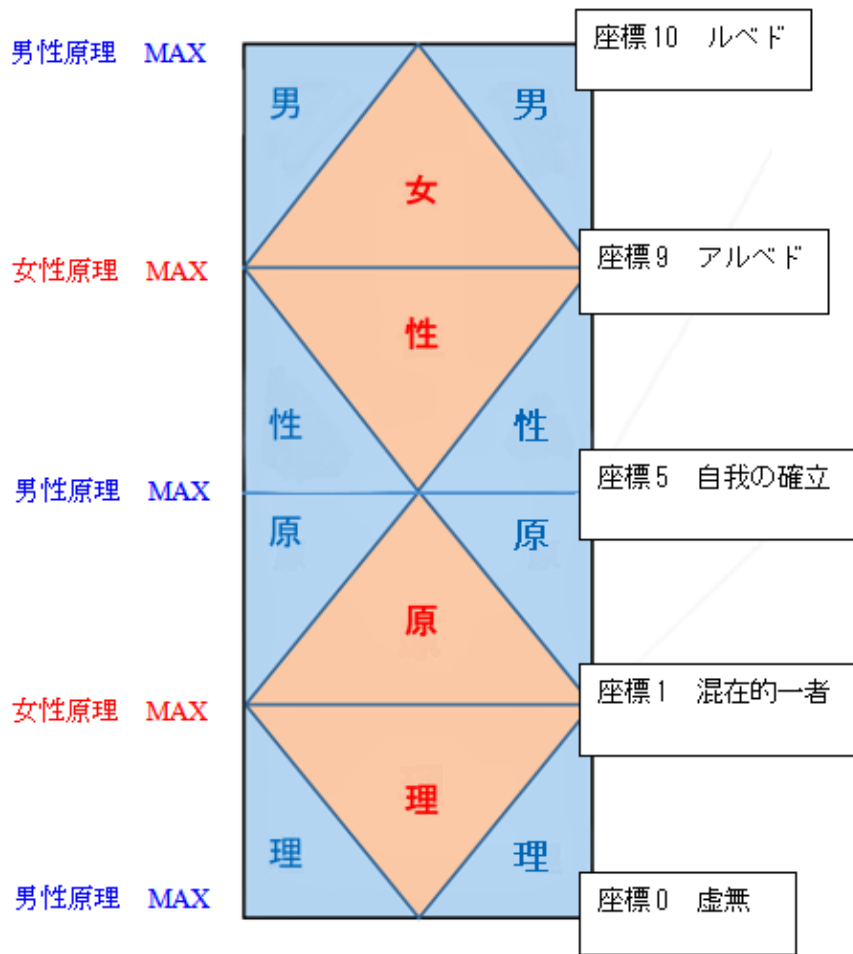


## 座標図



2022-05-26 \ (4 \).png

# 原理図



2022-05-26 \ (7 \).png

## 全体の目次

序 弁証法としての錬金術

座標9 アルベド

第1章 空間的にみるアルベド

第2章 時間的にみるアルベド

第3章 永遠の諸相

第4章 時空的に捉えるアルベド

第5章 倫理的にみるアルベド

第6章 マリア、イエス、パウロ

座標9～0 帰還と下降

第1章 アルベドについての追加考察

第2章 アルベドからの帰還と下降

座標0 ニグレド

第1章 虚無というアンチテーゼ

第2章 ディオニュソスの宗教

第3章 虚無による一致

座標10 ルベド

第1章 クレアティオ・エクス・ニヒロ

第2章 ジェネシス（創世記）

第3章 暁の太陽の真理

第4章 アルベドとルベド

第5章 神に干渉する人間像

第6章 人間＝神、神＝人間

## 第7章 神と黄金

## 第1章 クレアーティオ・エクス・ニヒロ



## (1) 賢者の石

### 錬金術の最終目標

ルベド（赤化）は、錬金術一般では、むしろ「賢者の石」と呼ばれることのほうが多い。そして「賢者の石」の獲得は、錬金術の最終目的である。つまり、すべての術師たちは、この賢者の石を手に入れるためにこそ、その生涯にわたる実務と思索とを、錬金作業（オプス）に投入したのである。

しかして賢者の石には、確かに、それだけの価値があった。

なにしろ、それは、あらゆる物質を、自在に変成させられる「万能のアイテム」なのである。

したがって、賢者の石を使用すれば、ゴミ屑から、黄金を作り出すことだって可能になるだろう。賢者の石はまさに「奇跡のツール」であり、その獲得は「財産の作り放題」すら可能にするはずなのだ。

しかし、まことに残念ながら、実際に、この「賢者の石」を獲得できた錬金術師はいなかった。

だって、もし、そんな奇跡的なツールを獲得できていたならばだ。錬金術師は現代に至るまで、巨万の富を持した「最上級の社会的エリート」として、世に君臨しているに決まっているではないか。

けれども現実には、今どこを探しても、そのような「エリート錬金術師」は見当たらない。それこそ、ただの一人もだ。

それが「賢者の石を獲得できた錬金術師はいなかった」という厳然たる事実の証拠である。

### 夢想の産物か

もう一度言うが、賢者の石を手に入れた錬金術師はいなかった。

では結局、賢者の石とは、夢想の産物だったのだろうか。妄想の産物だったのだろうか。

そうかもしれない。魔術師とも錬金術師とも呼ばれた、デッラ・ポルタ（1535 頃～1615）も次のように言っている。

\* 私はここで人々がいうところの金の山の約束はしないし、世界の人たちに評判が高くて、長年自慢されてきた賢者の石についても約束しない。また飲めば不死となる金の酒についても約束はしない。それらは単なる夢なのである。

澤井繁男『錬金術』より\*

いかにもそうだ。賢者の石が、もし手に触れられる「物的な何か」であると仮定したなら、私もまた、これを「夢想、妄想の産物」と定義づけなければならない。上のデッラ・ポルタと全く同様に。

しかしながら、賢者の石が、ある意義深い「心理経験のシンボル」だとしたら、私は「それは確かに存在する」と答えられる。

いや、もともとそうなのだ。心ある錬金術師たちにとっては、賢者の石とは、元来そういうものだったのである。ペトルス・ボヌス（1330年頃）という錬金術師も次のように言う。

\*秘密の石（＝賢者の石）は感官で捉えることはできない。それはただ知性を通じて、もしくは靈感（インスピレーション）ないし神の啓示を通じて、もしくは賢者の教えを通じてしか捉ええない。

ユング『心理学と錬金術』池田紘一、鎌田道生訳より\*

賢者の石とは、元来より、そのように「心をもって掴むべき宝」なのである。

そして間違いなく、賢者の石が、そうした“心的なるもの”であるならばだ。私は、ここからさらに一步を進めて「わたくし正道は、すでにそれを獲得している」と言うことも出来るのである。

## 石英の結晶

ところで賢者の石は、別名「赤い石」とも呼ばれる。

その赤という色相は、当然ルベド（赤化）と関連しているものと思われる。だがまずは、どうして錬金術師たちが「石」という言葉を使ったのかについて考えてみよう。

この「石」というものについての一般的なイメージは、おおよそ次のようなものだろう。



\*「石」は私たちが生きている大地を構成する堅固で重要な要素であり、砂や土くれが凝縮した個体であって、実在感、存在感を伴う。さらに「石」の中には宝石もあって、宝石は輝き、その輝きは星のきらめきにも類比されて、勢い天上的な意味が生ずる。

澤井繁男『錬金術』より\*

しかし、ここで私は、もっとずっと即物的に「石」というものを眺めたいと思う。

そうしてみると、一般的な石であるところの「石英」は、三角や六角の結晶をつくる。水晶のクラスター（房）などでは、その状態を肉眼で見ることにも出来る。

そして、この結晶と呼ばれるものには、必ず“芯”とも言うべき中心点が存在する。この中心点から、放射状に延びるようにして、結晶は形状化されているのである。

まず私は、実際にルベドを観た者として、賢者の石とは、そのような「結晶体としての石」のような特徴を持っていることを指摘しておきたい。

## 赤い結晶

そして錬金術師たちは、そのような石が「赤い」のだという。

もっとも、なぜ赤いのか、その本源的な理由を、彼らは教えてくれない。

もちろん賢者の石と、ルベド（赤化）との同一性が、石に、その赤という色を与えたのではあろう。

しかし、その場合は「ではなぜ、その象徴に赤化（赤くなる変化）という名を与えたのか」と、疑問が横にスライドするだけの話である。

たぶん錬金術師たちもまた、その答えを知らないのだ。おそらく彼らは、伝承通りに、ただ「それは赤いものである」と言っているだけなのだろう。

けれども私には確かに分かる。どうして伝承が、それを「赤いものである」と言い残したのかが分かる。

というのも、私が経験した「心的なるものとしての賢者の石」は、まさに象徴的な意味で“赤かった”からである。

ここまで言うておけば、次節から展開することになる本論に対する“枕詞”は、十分に書き尽くしたことになるだろう。そこでは“石英のように”中心点から放射状に展開する“赤い真理”が、たしかに描かれることになるからだ。

よって、本書の読者は、まもなく「賢者の石」を見ることになるだろう。それは、いにしへの錬金術師たちが、衷心から見ることを願い、ついにその願いを叶えられなかった真理である。限りなく高い価値を持った人類の宝である。

もちろん、それは物質ではない。肉の目では見ることの出来ない、純粹に心的なものである。

しかし、それは「宗教的な真理として、心の中の闇を、黄金のように輝かせるだけの

力」を、必ずや持っていることだろう。

## (2) 虚無からの存在の創造

### 巨大な力学的エネルギー

ここで、いったん「ニグレド」の座標の、その最後あたりまで話を戻すことにしよう。そこには、こう書いてある。

つまり、アルベドの「無限の存在」が、ニグレドの「虚無」というアンチテーゼを得て、ついに「虚無からの存在の創造」という総合状態が現出したのである。

以下の解説で、この一文を詳しく展開することにしよう。

さて、それが起こる場は、虚無の座標である。すなわち、座標0の「ニグレド」である。しかしながら、ある人間が「虚無の座標」の事情通であることは、べつに尊いことでも何でもない。

つまり彼が「群集心理に呑み込まれることが多い」「ディオニュソスの祭の現代版に、つねづね勤しんでいる」といった事自体には、大した価値はないのである。

それは実に“よくある事”であり、むしろ見飽きるほど、現実のなかで散見されることである。ならばそんなものを、取り立てて尊重する必要もなからう。

それよりも私たちが尊重すべきなのは「無限のエネルギーが、一気に、虚無の一点に注ぎ込まれる」という、強烈な力動性が発生した状況だ。

つまり、私たちが求めるべきは「力学的な巨大さ」なのである。そして、アルベディアンが、ニグレドの虚無に触れるとは、まさにそういうことであるのだ。

それに比べて、たとえば「教育の中期」にある者が、ニグレドの虚無に、足しげく通ったとしても、そこには大した力動性は生まれようもない。近場へちょっと出歩いたぐらいでは、大してカロリーを消費することもできない。それと同じである。

他方、アルベディアンの「無限の存在」「存在そのもの」が、虚無に向かって、その全エネルギーを注ぎ込んだらばどうなるか。そのとき、その極大の力動性の中で、いったい何が起こるのだろうか。

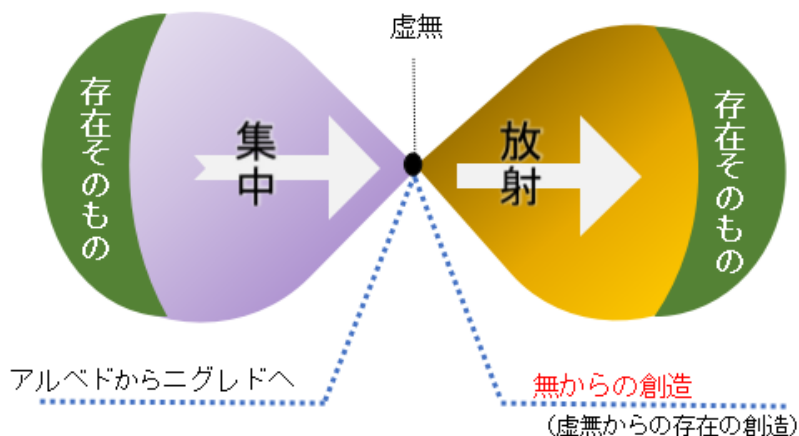
### 虚無を境にした反転現象

それは次のとおりだ。すなわち、無限存在の虚無への集中が、まさに、その虚無の一点を境界面にして、そこから反転的に「無限存在の放射」となり替わるのである。

つまり、虚無点から無限の存在が放射されることになる。

それは、扇形をシンメトリカルに並べた図形を考えると、分かりやすいものとなるだろう。

その図の実例が下図である。左の扇形は集中を表し、右の扇形は放射を表している。



これは、もしかしたら「ブラックホールが吸い込み、ホワイトホールが吐き出す」という関係性に似ているのかもしれない。

また、虚無の一点から存在が放射されている、その姿は、中心点から放射状に構造が形成されていく、かの石英結晶にそっくりである。そこに、この稀有な現象が「石」と呼ばれてよい根拠がある。

## 神との邂逅

だが、それよりも何よりも、ここでは紛れもなく「虚無から存在が創造されている」のである。

これは、何かに相似している以前の話だ。それはまさしく「虚無からの存在の創造」、つまり「無からの創造」そのものなのだ。

この「無からの創造」は、ラテン語で「クレアーティオ・エクス・ニヒロ」と言う。そして、実はこれが、キリスト教における「神の定義」なのである。

つまりこういうことだ。かりに読者が、キリスト教圏において「神とは何か」と尋ねられたとしよう。そのときには、あなたは「それは“無からの創造”です」と答えればよいのである。それが「無からの創造が、キリスト教における神の定義である」ということである。

そうだとすれば、である。私たちは、今ここで、神に出会ったことになる。少なくとも私たちは、キリスト教における「神の定義を充たした現象」と、いま確かに邂逅しているのである。

神に出会う。神に邂逅する。ここに、人類史にとって、どれほど重大な意義があることか！

しかも、今回の神は汎神（汎神論的）ではない。存在そのものの神ではない。ここで言う神は、その存在を在らしめる創造の神、在りて在る神、「創造神」なのである。

### (3) 時空的な創造神

#### 時間的な創造神

すでに時間的には、アルベドの段階においても、我々はこの「創造神」に出会っていた。そこでは「現在という時間的虚無から、過去と未来が放射されている」という形で、創造神が、その姿を現していた。

少しだけ、この時のことを振り返っておこう。

私たちが、その存在を確信できる時間は「現在」だけである。しかし、その現在には、つねに残像（過去）と、予期（未来）とが伴っていた。

そして実際のところ、この残像と予期なしには、私たちは、現在を感じることも出来なかった。

だから、私たちが“存在していると思っている現在”は、つねに過去と未来とを前提としていて、つねにそれを併せ持っていることになる。

これに対して、最も厳密に定義された「現在そのもの」は、時間的な「虚無」に他ならなかった。

ゆえに、これらの実状を整理すると、過去と未来は「存在」となり、現在は「虚無」となる。

そして、その両者が合成されて「現在が、過去と未来を放射する」＝「虚無が、存在を創造する」という相貌を作り出すことになる。

これが「永遠」と呼ばれるものであり、それは同時に、時間的にみた「無からの創造」ということになる。

これは当然「クレアーティオ・エクス・ニヒロ」であるし、英語で「ザ・クリエイター」と呼ばれる、創造神の出現に他ならなかった。

また、この場合、過去と未来は、現在から“創造されて”生じている。

したがって「創造されたから、そこに存在している」という、自身についての「存在の根拠」も示すことが出来ている。これは、その神が「在りて在る神」であることを物語っている。

#### 時空的な創造神の誕生

もう少しアルベドの座標に留まって、話を続けたい。

アルベドの座標の、時間面における「創造神」を見てきた訳だが、他方、空間面においては、その「神性のあり方」の事情が大いに異なっていた。

アルベドの空間面では、その神性は、ただいきなり「存在していた」。ただボワンと、無限なる存在が、唐突にそこに姿を現していたのである。

したがって、時間面におけるような「創造されたから、存在している」という“存在の根拠”もまた、そこでは全く示されていない。

そして、かような「存在の根拠を持たぬ神性」であれば、結局は「存在そのものである神」「汎神論的神」「汎神」と呼ばれるしかなかった。

したがって、この神に合一した人間もまた、そうした「汎神」の情報しか持ち帰れなかった。事実、空間面におけるアルベド体験とは、まさにそうした汎神による「存在の原理」を感得する体験なのである。

しかしながら主体は、その空間面においても「ニグレドに到達したならば」それによって虚無を獲得することが出来る。

すなわち彼を「誰でもない衝動」にまで還元する、ディオニュソス的な個性放棄の祭に参加させたならばである。

運命の導きが許したまえば、この暗く淫靡な祭礼に参列することによって、主体はついに「空間的虚無」を掴む。

そして、その虚無獲得により、ついに空間面においても「無限存在と虚無との合成」が執り行われる。その結果が、前節で見たような「クレーアティオ・エクス・ニヒロ」の現出である。

つまりそのとき、虚無の一点から、無限の存在が放射されることになるのだ。

## 放射的直線の変形

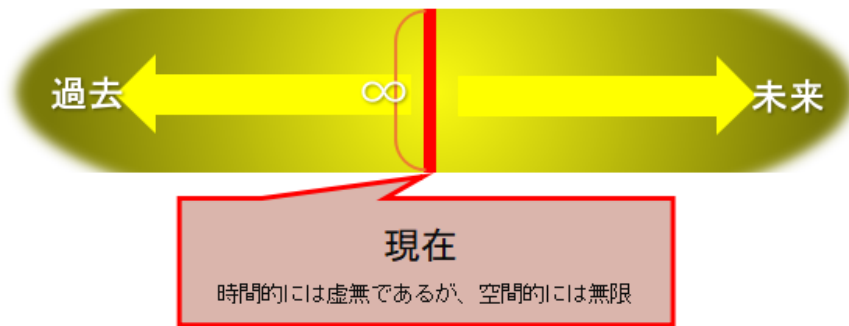
きわめて重要な内容なのに、その叙述が、少しシンプルになり過ぎているかもしれない。そこで、上に見た経緯を、ここでは図示を交えながら、丁寧に追っていかうと思う。

まずは、アルベドにおける放射的直線を見てもらおう。放射的直線とは、太さが無限、長さが永遠の直線である。そして、これが「アルベドの時空的な姿」である。

直線の中央には、虚無としての現在がある。この現在が、自身から、過去と未来を放射している。かかる放射状の時間が永遠である。

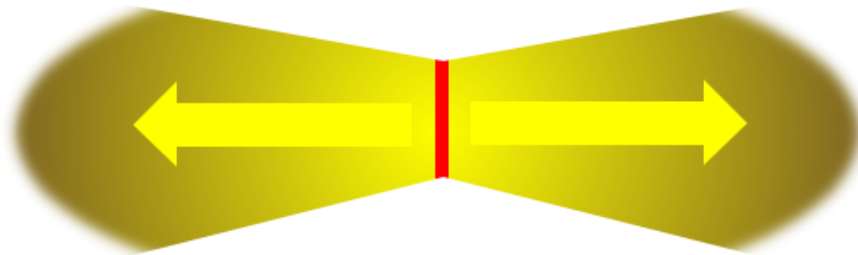
そして、時間的には虚無である“現在”を、空間的に眺めれば、それは「無限の存在」として見える。これが放射的直線の“太さ”にあたる。

放射的直線 (太さが無限で、長さが永遠である直線)



2022-05-28 \ (1 \).png

この放射的直線が、ニグレドへの下降に伴って、その太さを絞っていく。つまり無限であった太さが、その分量を削減していくのである。



かかるニグレドの底辺にあるのが「虚無」である。そこに近づくほど、アルベドの空間面は搾られていく。上の文章では、それを「削減」と現した。

けれども、この場合「削られて、減っていく」というイメージよりは、むしろ「分量を変えぬまま収縮し、密度が上がる」というイメージのほうが正確かもしれない。つまり小さくはなるが、重さは変わらない、と (=高密度化)。

そのような「高密度化による収縮」が行き着くところ。それは「特異点」である。

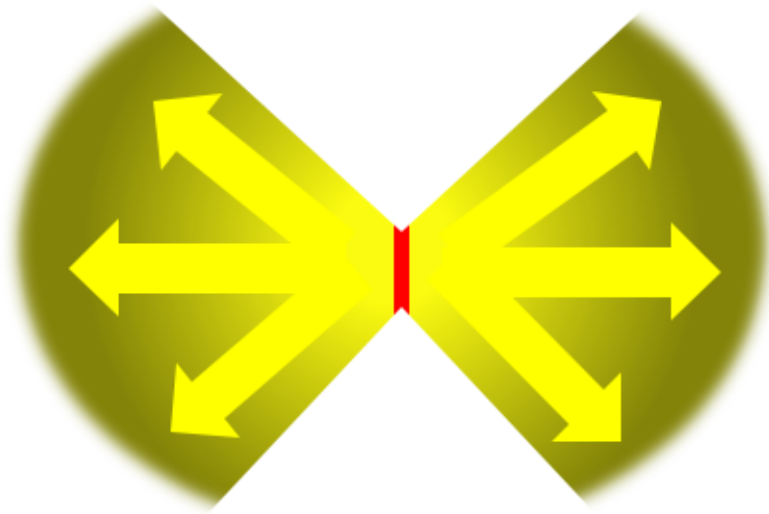
天文学における特異点とは、体積が0なのにも関わらず、密度が無限になる、矛盾的な点のことを言う。天文学者の謂いでは、ビッグバンの始発、ブラックホールの中心に、そのような特殊な点があるものらしい。

おそらく我らが「無限の存在」は、高密度化によって、そのような“特殊な点”になろうとしているのだろう。そうして最終的には、ビッグバン、あるいはホワイトホールを起こそうとしているのだ。



## 特異点と球形放射

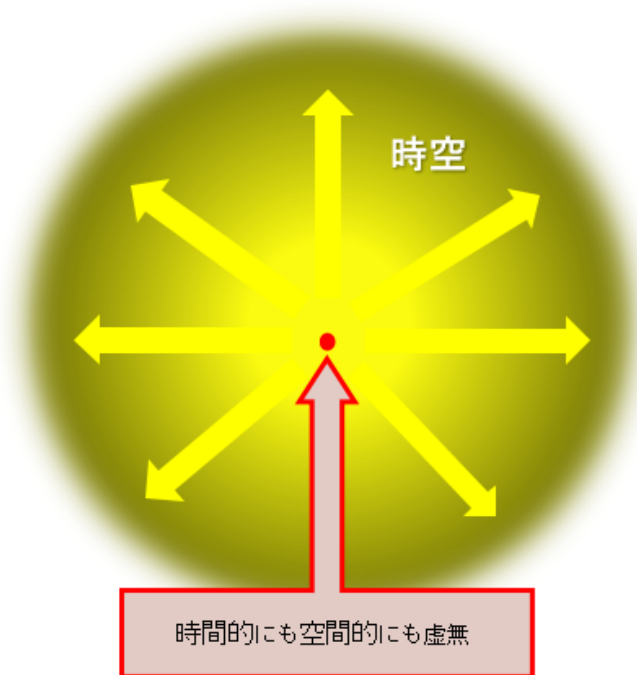
高密度化の過程にあって、放射的直線の太さは、さらに絞られてゆく。というより、ここまでくると、放射的直線には、もはや直線の面影はない。



その形態は、かなり円（球）に接近している。放射状の線（矢印）は、直線の枠を取り払われて、文字通りの“放射”を描き始めるのだ。

事ここまで至れば、アルベドの空間面は、すぐにも虚無を獲得するだろう。そのときには、ルベドへの昂進が起こるはずだ。

そして最終的な局面では、空間的無限は、ついに虚無にまで凝縮される。そして、その虚無から無限の存在が放射されることになる。



2022-05-28 \ (7 \).png

すでに放射的直線（アルベド）においても、時間は放射されていた。よって、それに空間の放射が加わった今は、その状況を「虚無から、時空が放射されている」と言うべきであろう。

時間と空間によって構成された「時空」とは、換言すれば、世界そのものであり、存在そのものである。

それが虚無から放射されているのである。そうであれば、これはまさに「クレアティーオ・エクス・ニヒロ」であり「無からの創造」「虚無からの存在の創造」である。

なお、アルベドにおいては、平行直進していた光（存在）が、ルベドでは、散開放射状に放たれる“球形”へとメタモルフォーゼする。

上図のごとき「変形していく放射的直線の連写」を見れば、読者としても、その変形過程を、かなり明確に追えるはずだ。

そして、メタモルフォーゼの最終的な形については、これを「球状放射」と呼んでもいいかもしれない。最後の図形は、明らかに“球”だからである。

では、なぜ「無からの創造」は球を描くのだろう？ それを知りたいならば、私たちは、夜空を見上げて、天体を眺めるべきだ。

地球や太陽を含め、大きな天体が球形になるのは、それが最も「偏りのない自然な形」だからである。その意味で、すべての偏りから逃れているであろう“創造神”が球形を描くことは、当然と言えば当然のことなのだろう。

## (4) 偉大なものは単純である

### 古来からの知恵

本章を読んだ読者は、ある種の不安を抱くかもしれない。なぜなら、神についての描写が、あまりにもシンプルだからである。

「神とは、こんなにも単純な姿をしているのか？ 偉大なる神の構造は、もっと複雑であって然るべきなのではないのか」

と、読者はそのように言って戸惑うかもしれない。

たしかに私が提示したのは、虚無が存在を放射しているという、きわめて単純な神の姿である。

構成要素は、虚無と存在のみ。しかも、それが一つになっているのだから、これを「単一要素」と言っても構わないぐらいだろう。まったくもって、これほど単純なヴィジョンもないかもしれない。

しかし、だからこそ私は、古来から伝えられている言葉を、今こそ声高に繰り返したいのだ。それは「すべて偉大なものは単純である」という、きっと誰でも、どこかで聞いたことがあるはずの言葉である。

この言葉を、直接的に私に教えてくれたのは、指揮者のフルトヴェングラーだった。彼の著書である『音と言葉』に、この箴言が載せられている。

青年時代にこの言葉を知って以来、私は心の奥底で、何度も「すべて偉大なるものは単純である」と反芻してきた。

そして、その途次で、同じ言葉を、次のように換言してもいた。すなわち「それが何であれ、単純なフォルムまで高まらないうちは、かかるものを真理（＝偉大なもの）と呼ぶことはすまい」と。

### 複雑性を包含した単純

本章の結論は、このような思索姿勢を貫いてきた人間の「追及精神の結晶」である。

というのも、私が提示した単純性は、ただ「ありのままに単純なもの」ではないからだ。それはむしろ、単純でなかったものを、単純なものにまで“突き詰めた”ものなのである。

実際、存在にも虚無にも、その内実や周辺には、細々として複雑な情報が、たくさん絡みついている。それについては『ヘルメスの杖』の座標の0から9までを一読すれば、読者にも容易に理解できるはずだ。

たとえば「存在」という言葉一つをとってみても、そこに私は「無限」「永遠」「放射的直線」「救済」という異なった位相を含ませている。しかも、その四つの位相は、各々でも、相当複雑な内容を秘めているのである。

しかし私は、複雑を複雑のままに留め置くことはしなかった。

私は複雑なものから、まず「存在」と「虚無」という二つの要素を抽出した。そして、その「存在」と「虚無」を、さらに単一の構造へと昇華させたのである。それこそが「無からの創造」の姿だった。

だから読者には、本書の結論の単純さを、どうか怯えることなく受け入れてほしい。この結論の単純さを、率直に受け入れてほしい。

ここにあるのは、あくまでも「無限の複雑性を包含した単純性」である。そして、その上ではじめて「すべて偉大なものは単純である」という最終的な真理が結論づけられているのだ。

## 第2章 ジェネシス（創世記）



## (1) 創世記の冒頭

### 天地創造

前章で掲げたような図示でもって“そのとき”の情景が、本当に読者に伝わるのか。それについては私にも分からない。ただ私は、精一杯の努力によって、あの光輝あふれるヴィジョンを、読者に伝えようとはした。

いずれにしても、ルベドにおいて「虚無から存在が創造される」ことは間違いがない。しかもアルベドの時とは異なり、今回は、時間的にも、空間的にも、虚無から存在が創造されたのだった。

この理を知ることによって、私たちは、宇宙の長い歴史を超越する。既存の世界を白紙に戻して、ついに「時空の始まり」まで遡る。そうして私たちは、かの『創世記（ジェネシス）』の冒頭シーンに立ち会おうのだ。

そこには、こう書いてある。「初めに、神は天地を創造された」と。そのようにハッキリ書いてある。

これを言い換えれば「初めに、神は“存在”を創造された」ということになるだろう。

というのも、古代人が「天地」と言うとき、それは現代的、抽象的に表せば「存在するものすべて」となることは、あまりにも明白であるからだ。

### 恒なる始原の今

ことの初めに、神は天地を創造されたのだという。

ところで、変に言葉に踏みまよう前に、まずは、この「初めに」という言葉の中から、ブロック（妨害物）を取り除いてしまおう。

そもそも私たちは、歴史の“初め”に至るために、138億年の宇宙史を遡る必要がない。

なぜなら私たちは、すでに「永遠とは何か」を知っているからである。永遠という時間にあっては、過去の創始は“現在”にある。私たちは確かにそれを知っている。

つまり、私たちは（というより、アルベディアンは）、現在が、歴史の始まりとなることを知っているのである。よって私にあっても、創世記の冒頭で語られる「始まりの時」を“現在”に定位することに、全く躊躇いがない。

いわば現在は「恒久的な始原」なのだ。その常に始原なる今において「神は存在を創造された」ことになる。ならば今日こそが『創世記』の冒頭部に記されている“初日”となっても、一向に構わないはずなのだ。

## 光と闇の分裂以前

まずは事実確認のため、『創世記』の冒頭（第一日目）を節分けしたものを、以下にご覧になっていただこう。

- 1、初めに、神は天地を創造された。
- 2、地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。
- 3、神は言われた。「光あれ。」こうして光があった。神は光を見て、良しとされた。
- 4、神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。
- 5、夕べがあり、朝があった。第一の日である。

ルベドに定位している今、始原なる今、私たちが見ているのは「光と闇が分かれる前の世界」の姿である。これを「存在と虚無が分かれる前の世界」というふうに言い換えてもいい。

というのは、『創世記』の冒頭によれば、光と闇が分かれるのは第4節であって、天地創造は第1節だからである。第1節が、第4節よりも以前の世界であることは当然だろう。

第1節 初めに、神は天地を創造された。

第4節 神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。

逆に言うと、これまでずっと分けられていた光と闇、あるいは存在と虚無とを合成することによって、主体は、真の“始原”まで到達したのである。

すなわち『創世記』第4節を超えて、私たちは『創世記』第1節という「始原の始原」まで辿り着いたのだ。

この地点こそ、創造の瞬間であり、真のジェネシス（起源）である。無の静寂から一転、全ての存在が一斉に産声を上げた、その最初にして永遠無終の一音である。

また、これこそが、真なる「創造神」の姿でもある。つまり、これが世界を創造する神の、その何の飾り立ても為されていない裸の姿なのである。

そして、そうであるならば、ついに主体は、時間においても、空間においても、創造神の真の在り方を知ったのだ。

これこそ、全ての「↑」的な宗教者、哲学者が求めた、神の認識（コグニイテイオ・デイ）である。かの哲学者ヘーゲルは「神を認識することこそ宗教の唯一の目的である」とさえ言っている。





## (2) エデンの園

### 神と同型の人間

ところで『創世記』の冒頭とえば、かの第 27 節のことも忘れてはならないだろう。すなわち、その章に書かれている、次の重要句のことである。

神は自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

ここには「神が自分の模像として人間を創った」という、きわめて重大な宣言が記されている。

かたどったとは、漢字で書けば「模った」である。だが、その含意するところのものは、限りなく「同型」に近いのではないだろうか。

というのは、模ったを英語で表すならば「コピー」になるはずで、原紙とコピーの見分けがつかないことなど、私たちの経験上にも、いくらでもあるからだ。「それほどの同一性を、神と人間は持っている」と、聖書は宣べている。

コグニテイオ・デイ（神の認識）を得た今、私たちは、この第 27 節の言葉を見無視する訳にはいくまい。神の認識を持った主体は、自分が認識したものが、まさに創造神の姿と同型であることを認めるからだ。

しかも、ここには“大きな争点”もが含まれている。すなわち、ずっと昔から「神学者の言い争いの種」となってきた疑問が、ここには含まれているのだ。だから、なおさらこの第 27 節を見無視することは許されない。

### エデンの園の人間たち

その争点とはなにか。それは、神と同型なのは「男も女も」なのか、それとも「男（アダム）だけなのか」という問題である。

まず、この第 27 節では、上記のように「神にかたどって創造された。男と女に創造された」となっている。つまり男女は、同時に創造されたように書かれている。

しかし、有名なエデンの園のエピソード(第2章第18節以降)では「最初に創造されたのは、男であるアダムだけであった」ということになっているのだ。

主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹きいれた。人はこうして生きる者となった。主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら〔自分に似せて〕形づくった人をそこに置かれた。

それに対して女(エヴァ)は、アダムの骨を材料にして“後出し”でもって生まれてきた。

しかもエヴァは、現代でも認められる男女の相違と同程度に「神と同型のアダム」とは異なった形状で生み出されたのだった。

主なる神はそこで、人(アダム)を深い眠りに落とされた。

人が眠りこむと、あばら骨の一部を抜き取り、その跡を肉でふさがれた。そして、人から抜き取ったあばら骨で女を造り上げられた。

これでは当然、神と同型であるのはアダム(男)だけになってしまう。

となれば、ある意味で、この「創世記第2章第18節以降」は男尊女卑の根源でさえあった。なにしろ教父テルトゥリアヌスなどは、次のような極論すら披瀝しているのだ。

\*最初の女性が作られるときから問題があったのを心に留めておくべきだ。女は曲がったあばら骨、男にまるで背くかのように曲がった胸の骨から作られた。それゆえ、女は不完全な生き物であり、常に裏切るのである。

ダン・バーンスタイン編、沖田樹梨亜訳『ダヴィンチ・コードの「真実」』より\*

## 両性具有としてのアダム

しかしである。神と同型のアダムは、正確には「両性具有の人間」だったはずなのだ。

これは考えてみれば当然であろう。なにしろ、人類最初の女であるエヴァは「アダムの肋骨を材料にして創られた」のだから。

そうだとすれば、エヴァの登場以前には、その「女の材料としての肋骨」は、ごく自然に、かの“アダムの体内”に組み込まれていたことになる。

したがって、エヴァ登場以前のアダムは、一応彼を「男」と呼ぶにしても、その内実は「女性であるエヴァを含有した男」ということになるのだ。

もっとも、ここでは、女性（エヴァ）は、骨としての立場に甘んじている。だから当然「人間としての、意識の主導権」は、男性であるアダムが握っていただろう。

しかしそのアダムの意識は、きっと半分は、あるいは幾分かは「女性的でもあった」はずである。そのときアダムは「自身に内在させている」エヴァ（骨）からの“精神的影響”を受けずにはいられなかつただろうからだ。

よって、総体として見れば、かかるアダムは、紛れもなく「両性具有の人間」ということになるのである。彼は男でもあるし、女でもある。そのように言わざるを得ない。

だから我々も、女性を除け者にしてまで「男尊女卑」を説く必要などは、全くない。そんなことをすれば、私たちは「自分自身で、我が身の一部を切り取る」という愚行を犯すことになる。

そして、そんな手荒い切除をすれば、私たちは、取り返しがつかないほどの失血をすることだろう。

そうしてついには、自分自身に、思想的な致命傷を作るかもしれない。あの恥知らずな文章を書いた、教父テルトゥリアヌスのように。

## 神の似姿としての人間

とどのつまり「神が自分にかたどって創造した人間」とは、この両性具有のアダムなのである。

ただし、このアダムを、単純に「男性アダムと、女性エヴァの結合」と考えると、話の本質が見えづらくなる。

むしろ我々は、この両性具有のアダムを「エヴァと、蛇、の総合（結合）」と考えたほうがいい。

そのほうが、話の筋が、ずっと捉えやすくなる。たとえ、この言い方が、常識的な感性には、大いなる抵抗感を催させずにはいられなくとも、である。

では、この込み入った問題の説明を始めることにしよう。

まず初めに「エデンの園」における「たった二人の人類」のうちの「唯一人の女性」であるエヴァのほうを見てみたい。

我々にとって彼女は、女性原理である「アルベド」の象徴になりうる。この世界に女性がエヴァ一人しか存在しないならば、そのまま彼女は、女性性を統べる者（原理）として見なすことが出来るからだ。

ここまでは読者も、抵抗なく私の言葉を受け入れられるだろう。

## エヴァと蛇

問題となるのは蛇の存在である。

かかる蛇は、エヴァをそそのかして、彼女を夫のアダムもろとも「楽園追放と、下界への放逐」の憂き目へと追いやった。これはおそらく、世界で最も有名な追放の物語であろう。

しかし、あえて結論から言ってしまうが、この蛇は、おそらくは「虚無の象徴」なのである。

察するに、かかる蛇には「アルベドからの下降」と「下降の底辺にある虚無の提示」が、任務として与えられていた。つまりは、蛇＝ニグレドだ。

実際、虚無神ディオニュソスは、蛇として描かれることも多い。

そうだとすれば、エヴァと蛇が結合することは、アルベドの「存在そのもの」と、ニグレドの「虚無」が総合されることに等しいだろう。

こうして生じるのは当然「ルベド」であり、換言すれば「虚無からの存在の創造」である。

そして、これを達成するルベディアンは、その心の内に、アルベディアンと、ニグレディアンを宿している存在に他ならない。

つまり、弁証法における「総合」は、常時その中に「定立」と「反定立」を含んでいるのである。この場合は「ルベドは、常にその中に『アルベド』と『ニグレド』を両方とも内在させている」ということだ。

ということは、ここでアダムをルベディアンであると仮定すればである。彼の内には、アルベド（女性原理＝エヴァ）も、ニグレド（虚無＝蛇）も、無理なく、その身の置きどころを確保できるのである。

それこそアルベドは脇腹あたりに“肋骨として”収めてよいし、虚無ならば、場所を取らないので、どこにでも収納可能であろう。

こうしてアダムは、十全に「両性具有の人間」足りうることになる。

## 神の似姿

確認するが、両性具有のアダムは「アルベドと虚無とを弁証して、ルベドに至った主体」に等しい。

だから、ルベディアンとして「神の認識」を得た主体もまた、アダムの役回りをさせられて、神からこう言われることになるだろう。すなわち、「私は、自分にかたどってお前を創造した。よって、お前は神の似姿なのだ。さらに本質的な部分について言えば、お前はまるきり私と同型なのだ」と。

かかる神の言葉に対して、ルベディアンである主体は、次のように答える資格を持っている。

「はい、私もそれを存じ上げています。私の本質は、あなたと同じものです。それは『無からの創造』なのです」

もしかしたら、かつてのエデンの園でも、創造神と、両性具有のアダムによって、そのような対話が交わされたかもしれない。

ところでクリスチャンは、聖書を読みながら、次のような疑問に駆られることがある。  
すなわち彼は、人間である自分を顧みつつ、

「どうして自分のような“しがない”存在が、神の似姿などと言われるのだろう」

と考えてしまうのだ。どうして『創世記』には、そうした「読むもおこがましいこと」  
が書かれているのだろう、と。

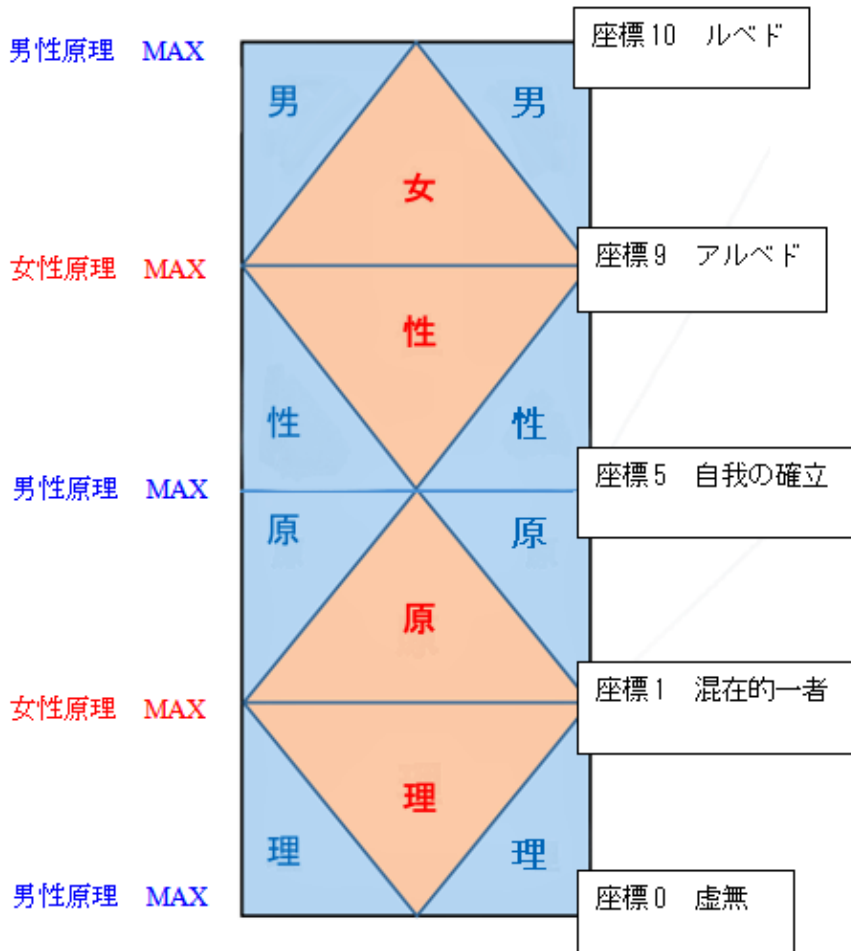
しかし、今ならば、その「おこがましいこと」が、ちゃんと彼のなかで腑に落ちるの  
ではないだろうか。結局「神の似姿としての人間」とは、私たちが普段見ている、一般  
通念的な「人間」ではないからである。

では「神の似姿としての人間」とは何か？

それはまさしく、エヴァと分裂する以前に存在した、両性具有のアダムであり、エヴァ  
と蛇の合成であり、そして何よりルベディアンなのである。

(3) 両性具有の男性原理

**原理図**



2022-05-26 \\\ (7 \\\).png

ルベドは男性原理か？

ところで、原理図を見る限り、ルベドは男性原理の表れに他ならない。ルベドは「虚

無からの存在の創造」であり、そこには虚無が含まれている。そして「座標2 教育の初期」で、私は男性原理について、次のような規定をした。

\*男性原理の意味するところは「分けること」である。ゆえに、分離、分化、分析、といった言葉が、まずこの原理に属している。

そして何かを分ければ、その面積や体積は必ず小さくなる。そのため、もともとの状態を小さくする力もまた男性原理に含まれる。ゆえに、集中、抽出、収縮、といった言葉もまた、男性原理に含まれてくる。

そして、その最も極端な状態が「虚無」である。虚無をそれ以上に収縮させることは出来ないからである。\*

したがって、虚無を含んでいるルベドは、たしかに「男性原理の表れ」ということになるのである。

しかし、正確には、その虚無が、存在を創造している姿こそが「ルベド」である。

そのとき虚無は「存在そのもの」と、絶対に切り離すことが出来なくなっている。それを切り離してしまったら、もはやルベドは、何らの「創造」も意味しなくなるだろうから。

## 両性具有の男性原理

ということは、ここで言う男性原理は、本質的には、女性原理（アルベド、存在そのもの）を伴った「両性具有の原理」なのである。この原理の人間的象徴である、両性具有者としてのアダムと同様に。

そう、かのアダムと同様に、意識的なイニシアチブ（主導権）は、たしかに「男性原理である虚無」が握っている。

なにしろ虚無には「つねに何か一点に向かっていく、意識の集中性」と同質のものがあるからだ。意識のスタイルと同質ならば、それが意識的なイニシアチブを取るのは当然であろう。

逆に見れば、集中していない「散漫な意識」などというものは、ほとんど「意識的ではない」と言うのと同義なのである。

よって、集中点を持たない「存在そのもの」は、ある意味で散漫なものであると言える。そして、かかる「存在そのもの」は、アルベドの表れであり、また女性原理の表れでもある。

したがって、ここでも「肋骨であるエヴァ」は、体全体を統括する意識であるアダムに対して従属せざるを得ない。

すなわち「存在そのもの」が、かように集中性を欠くものであるならばだ。当然彼女



は“虚無に優って”意識的なイニシアチブを取るような真似は出来ないのである。

しかし、しかし、だ。その反面で、男性原理である虚無は、ルベドにあって、女性原理である「存在そのもの」と固く結合されている。

ゆえに、その男性意識は明らかに、女性的でもあったはずである。そのとき虚無は、自身と結合している「存在そのもの」の影響を受けずにはいられなかったからだ。

かくして「ルベドが男性原理の表れである」と言うとき、その男性原理が、同時に女性的でもあることが明らかになる。

よって、このことを表す“総合的な”言葉を探すとすれば、やはり「ルベドは、両性具有的な男性原理の表れである」といった表現に行き着くしかないのである。

### 虚無の両性具有性

事のついでに、ここで「虚無」の男性原理についても言及しておこう。つまり座標0が背負っている“男性原理”について明らかにしておきたいのだ。

原理図においては、座標0もまた、男性原理の表れである。しかし、この男性原理もまた、やはり「両性具有的なもの」と言ったほうが正確になるだろう。

というのも、厳密に言えば「虚無」というものに、性差などあるわけがないからだ。

たしかに、虚無に近づいていく過程には「集中」という男性原理的なものが働くだろう。

とはいえである。一度その目的地である「虚無そのもの」に達してしまえば、もはやそこに男性も女性もあろうはずがない。

それはそうだろう。なにしろ何の特徴（個別性、個性）も持たないからこそ、虚無は虚無たりえるのだから。

むしろ虚無は、それを“眺める者”の願いどおりの性を帯びる。深層心理学的に言えば、投影のための「空っぽの器」になる。

ごく単純に言えば、男性がそれを求めれば女性のように見えるし、女性がそれを求めれば男性のように見える。

ただしこれは「虚無からの存在の創造」が、「男性原理も女性原理も含んでいるので、両性具有の原理と言える」のとは、全く正反対の事情ではある。

すなわち虚無の場合は、それが男性原理も女性原理も持たないので、どちらつかずに、両性具有の“ように見える”のである。

そして古来から、誰よりも雄弁に「虚無」を象徴する者こそが、かのディオニュソス神だった。

だから、この男性神もまた、ときに女のようにであった。つまり彼は、ときに女装させられたり、女性的美少年として描かれたりしたのだった。

たしかに原理図で座標0は「男性原理」ということになっている。だが読者にあっては、この男性原理もまた、実際には「両性具有のニュアンスが強い」ということを知っておいて頂きたい。

## 創世記の不可思議性

それにしても、どうして『創世記』には、これほどにも多くの、深い叡智が秘められているのだろう。

冒頭の「創造の言葉」はもちろん、エデンの園の設定なども、きわめて意味深長である。あえて『創世記』を一種の創作物と見なすならば、そこでは、ルベドの悟りの内容と、優れた文学性が、まさに渾然一体をなしていると言える。

そうして結果的に、辺り一面に真理の花が散りばめられた、馥郁たる宗教的叙事詩が現出しているのである。

こうなると私などは「かかる『創世記』は、ほとんど“人類の知的限界を超えて”書かれているのではないか」と言いたくなる。

もちろん、聖書が「人の手を使って、聖霊によって書かれた」書物であることは、キリスト教会でも、ちゃんと教理化されている。私もまた、それを認めるにやぶさかではない。

だが、そうだとしてもである。この『創世記』に込められた叡智は、あまりにも突出して破格のものだ。やや安っぽい疑念ではあるが、一体『創世記』の作者とは誰だったのだろう？ と考えずにはいられない。

もはや私は、ヤハウィスト（J）やエロヒスト（E）の話では満足できない。出来ることなら本当に、“文書の核”を作った、当の人物の顔を見たいものである。さだめし、相当に優れた宗教者だったことだろう。

いずれにしても、ルベドの悟りと、『創世記』に込められた象徴には、確かなつながりがある。私は今も、それを肌身に感じている。

よって私は『創世記』が、真正なる靈感の書であることを、ここに確言する。これこそ真の意味における『聖書』である。そこに書かれている神もまた、真実の神である。

だから私には、グノーシス主義者のように、創造神を「邪神ヤルダバオト」などと言って揶揄することは出来ない。そのうえ反現世（創造神が創った世界の否定）の立場に身を置くことなど、なおさら出来はしないのである。

### 第3章 暁の太陽の真理



## (1) 第一質量とルベド

### 虚無の別名

錬金術では、ルベドのことを、どのように説明しているだろう？

まず虚無についてだが、錬金術において、これを象徴しているのは、おそらく「第一質量」である。

この第一質量は、錬金術一般では、きわめて原初的な物質とされている。すなわちそれは「乾・湿・熱・冷の属性を持つことで、火・気・土・水になる前の、基本的にして初原的な原質」と説明される。

そしてユングは、彼の『心理学と錬金術』という著作の中で、第一質量と賢者の石（ルベド）の関係性について、次のように述べている。

\* 第一質量が、しばしば〔賢者の〕石と呼ばれるのも、その〔両者の同一性の〕ためである。

ただ最初の状態は、隠れた状態であるが、それが術と神の恩寵とによって、第二の、顕在的な状態（＝ルベド）に移し置かれるというだけの話である。

それゆえ第一質量は、時には、作業過程の最初の状態を示す「ニグレド」という概念と一致することになる。

その場合、第一質量は黒き地であって、そこに黄金、もしくは〔賢者の〕石が、ちょうど小麦の種子のように蒔かれる。それは黒い、摩訶不思議なほど肥沃な土であって（中略）「黒い、黒きが上に黒いもの」と形容されることもある。

〔上述したように、この沃地から種が芽吹き、やがて花を咲かせれば、第一質量は、第二の、顕在的な状態に移し置かれる。すなわち、作業過程の最終の状態を示す「ルベド」という概念と一致することになる。〕\*

ユング独特の難渋な文章を分りやすくするため、改行や句点を増やしたり、ユングの考えを敷衍した文章を後付けさせて頂いた。その点、どうかご容赦ねがいたい。

### 貶められる第一質量

基本的に、虚無とは、どこにでもあるものである。「虚無=0=0次元=点」は、位置を特定するだけのものだからだ。

よって、誰がどこを指しても、そこに虚無はあることになる。この意味で虚無は、世界に遍在しきった、もっとも希少価値がないものと言えるだろう。

だから、この「虚無の象徴としての第一質量」は、その価値を、非常に貶められた風に言い表されることがある。というより、それはもはや無用のもの扱われるのだ。

特段ひどいものになると、第一質量は「汚物の中に含まれている」という文章まである。つまり「それは、あの無価値な糞尿にだって含まれている」と言いたいわけだ。

いや、たしかに、そこにもあるだろう。どこを指してもあるのだから。とはいえ「何もそこまで言わなくても」という気がしないでもない。

そして、このような卑下的表現の線上に「ニグレドに等しい第一質量」という表現もある訳だ。

ことに「黒い、黒きが上に黒いもの」という言い方には注目してよい。ここには「色彩としての黒」から、さらに黒みが深まった「闇としてのニグレド」への深化のニュアンスが感じられるからだ。

そのような暗い闇の奥底で、第一質量（虚無）は、誰からも尊重されることなく眠っている。まるで汚物のように、人に見向きもされないままで。

## 価値逆転のとき

ところが、かかる不可触賤民のような第一質量が、錬金術作業の介在を受けることによって、一挙に価値逆転を起こすのだという。

それは即ち、アルベディアンが虚無を発見し、その「虚無の意義」を可視的に露出させた時のことを言っているのである。実際、ルベドまでの“伸びしろ”を持ったアルベディアンなら、必ずや「その時」をものにすることが出来るだろう。

これまで通りの言葉づかいをするならば「アルベディアンが虚無を発見する」とは、アルベドの「存在そのもの」が、ニグレドの「虚無」と結合（弁証）されるということである。

であれば、そのとき存在と虚無の頭上には、結合（総合）の状態として「虚無からの存在の創造」が出現することになる。

それによって、第一質量（虚無）は、「無からの創造」という結晶状の真理の“中心点”となる。

これこそ、それまで価値を隠蔽されていた第一質量が、その真の価値を「顕在的な状態」に移し変えられた瞬間と言えるだろう。

「無からの創造の中心点」——それは、世界で最も高い価値を有する“位置”である。それゆえ第一質量は、いまや、黄金に喩えられ、賢者の石と呼ばれることになるのである。

## (2) 神との同一本質

### 胚芽として常在している「神の材料」

第一質量（虚無）は、物質的、現象的に「どこを指してもある」ばかりではない。群集心理によって露わになるように、それは私たち人間の、心のなかにも潜在している。

改めて言えば「私たちの心のなかに虚無はある」のである。

しかし、私たちの心が、虚無だけで満たされている訳ではない。虚無を抱きつつも、なおかつ私たちは、自分たちが確かに「ここに存在している」と思いながら生きている。

つまり私たちの中には、「虚無」と「存在」の二つが常住している。

この「虚無」と「存在」は、その究極的な状態にあっては、まさに「虚無からの存在の創造」の構成材料である。

究極的な状態——つまり「存在」のほうが「存在そのもの」である、アルベドまで高められれば、ということだ。

かかる状況にあれば、私たちは「虚無」と「存在」を弁証して「無からの創造」である、創造神を認識することすら出来る。

むろん、そのような究極の状態はなかなか作れないし、それゆえ「存在」のほうは、人類の大部分において“胚芽状態”にある。

とはいえ、私たちの心の中には、確かに「虚無」と、何らかの「存在」がある。

つまり私たちの心中には、つねに「無からの創造」の、二つの構成材料が用意されているのだ。それは不十分な状態であるし、かつ潜在的でもある。だが、たしかに材料が二つとも揃って「ある」のである。

もちろん、それは錬金術師が言う「潜在的な第一質量」という状況下での“ある”である。それゆえ「糞尿のように、ほとんど価値のない状態」としての“ある”である。

だが、それでも確かに「あるものはある」のである。そこには、言わば「神の材料」が、胚芽状態で揃っている。これだけは唯一固い事実だと言い得よう。

### 如来蔵としての「虚無と存在」

この胚芽状態の「神の材料」が、仏教で言われるところの「如来蔵」である。如来とは仏のことであり、蔵とは「見えないところに隠し持っている状態」を言う。

よって如来蔵とは「万人の心に、仏が、見えない胚芽（胎児）の状態で見え隠れしている」ということを、伝えようとしている言葉なのである。胚芽と胎児は、概念としてかなり近いものがあるだろう。

そして、グノーシス主義では、如来蔵と同じような内容が「光の種」とか「神とのホモ・ウシア」という形で表現されている。ホモ・ウシアとは「同一本質」のことだ。

したがって、ここには「どんな人間にも、その心の奥底には、本質的に神と同じものが潜んでいる」という考え方が込められているのである。

もちろん、キリスト教には、このような発想は存在しない。

なにしろキリスト教においては「人間の中に、神の本質に通じる要素がある」と主張すること自体が“悪”なのだから。それは神への冒瀆であり、宗教的重罪なのである。

そもそもキリスト教においては、その第一義として「人間の本性には、何の価値もない」ということが決定されている。この定義から、キリスト教における神学構築の全てが始まる。

そして、この定義を土台にして「したがって、ただ神からの恵みだけが、価値のないものを、価値あるものに変えることができるのである」ということが教えられる。

そうしたことが「人間にとり唯一の救済方式である」という形で、信者たちに、「救済の神学」が説明されるのである。

だから、ここで私が言っていることは、キリスト教にとっては、異端思想のきわみなのだ。それは重々分かっている。しかしルベディアン立場に立てば、その経験値から、私は認めるしかないのだ、

「どんな人間にも、その心の奥底には、本質的に神仏と同じものが潜んでいる」

ということ。この極めて反キリスト教的な帰結を。

## 向上の原動力

そして、このような「如来蔵」「光の種」「ホモ・ウシア」があるからこそ、私たちはヘルメスの杖という梯子を登れるのである。それらが私たちの向上心の原動力なのである。

つまり私たちは、無意識裡に、断片的に、自分の本質を想起しながら「その本質が完全に顕在化される高み」へと近づこうとするのだ。

デルポイ（ギリシア）の有名な銘文は「汝、自分を知れ」と私たちに教える。

しかし、私たちは本来、教えられるまでもなく、無意識のうちに、自分を知らうと“してしまう”のである。

なぜなら我々は、その「自分」「自分の本質」が、素晴らしいものであることを、いつも心のどこかで分かっているからである。

誰だって「すばらしい自分」がいるなら、それに出会いたいはずだ。それは、きっと万人が持ちうる欲求である。誰だって、出来るならば、自分を肯定したいに決まっているのだ。

この欲求が「ヘルメスの杖」を登ることを、すべての人間に宿命づけることになる。

そして、ありがたいことには、この欲求と宿命に従うことは、私たちにとって、決し



て愚かな選択などにはならないのだ。

なぜなら、人間の「神との同一本質」は“うまくすれば”ついには彼を、至高の宗教的高みへと導くからである。確かに彼を「ルベド」「賢者の石」「無からの創造」という高みへと導くからである。

### (3) 色彩の変化

#### 色の変化への関心

第一質量の次は、錬金術用語としての「ルベド」に着目してみよう。日本語で「赤化」と訳されるルベド。つまり、その語句が言わんとしていることは、何かが時宜をえて「赤く変わる」ということである。

もともと錬金術師たちは、作業中に見られる「化合物質の色の変化」に、大変強い興味を示していたという。

\* 卑金属を貴金属に変えるための作業は「投影」と呼ばれ、変成（変質）そのものは「着色」とよばれた。〈黒化〉〈白化〉〈赤化〉の例を持ち出すまでもなく、錬金術師は一般的に、色の変化に執着した。

澤井繁男『錬金術』より\*

復習しておくど、アルベドは「白化」、ニグレドは「黒化」、そしてルベドは「赤化」と訳されている。もっとも私見では「大錬金術のために、更新されたニグレド」は、むしろ「闇化」と訳されたほうが適切であると思っているが。

ともあれ、ここでは、この三色について、順を追って考察してみたいと思う。

#### 太陽と白化

錬金術の淵源には「ヘルメス学」という、古代エジプトの学問がある。そして、このヘルメス学は、太陽崇拝の学でもある。

だからこそ、ヘルメス学の徒だったコペルニクスは「中心にある太陽を、地球が回る」という地動説を思いついた。また、ヘルメス・トリスメギストスの著とされる『エメラルド板』にも、その末尾に、

「太陽の働きにかけて、わが述べたる言葉に欠くところなし」

という太陽への信仰告白が書かれている。

こうした経緯により、錬金術師たちは「色の変化」についても、その意義を太陽の状態になぞらえることが多かった。

その点から言うと、「白化」であるアルベドは、真昼の太陽に当たりそうである。白日（真昼に照り輝く太陽）という言葉があるように、太陽光が最も白く光るのは、朝よりも夕よりも真昼だからである。

そもそも、白という色を「白い光」と解釈するならば、これを「可視光に含まれる全ての色を総合した色」として定義することが出来る。

よく「虹の七色」と言われるが、「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫」という多様な色を一つに合わせると、それが白い光になるのである。

となるとだ。ここにはアルベドの空間面で見られる「全にして一」という特性が、隠喩的に表れていると指摘せざるを得ないのである。

## 月夜と黒化

次に「黒化」であるニグレドだが、これを太陽の運行に擬えるならば、やはり「夜」とか「真夜中」になるだろう。

とはいえ、もし夜空に月が昇っているならば、そこには薄明かりがまだ残っているはずだ。太陽の光を反射して、地を照らす「月」がまだあるならばである。

それは闇夜ではなく、月明かりによって「黒き大地」を浮かび上がらせる夜だ。生暖かい風が吹く、どこか艶めかしい夜だ。そして怪しくも美しい、女性的な夜だ。

あるいは「子宮の暗がりのうちで命を育むような、母性的な夜」と言うべきか。またあるいは「月夜の薄暗がりの中で男女が交わって、肉体を混在させる、性的オルギアの夜」と言うべきだろうか。

このような大地母神的な夜は、当然、混在的一者的な“意識の昏さ”としての「黒化」を象徴するものたりえるだろう。

すなわち、この「混在的一者の意識段階」を生きる主体は、その分化能力の欠如のために「分別」を持つことがないということである。

そして無分別であることは、社会的に見れば“悪いこと”である。

だから、やがて「自我の確立段階」に至った主体は、かつての「分別のない、無意識的な自分」を振り返り、これを“罪の意識”をもって眺めるのだろう。忸怩たる思いをもって、深く懊悩しながら。本当に、どこまでも痛ましげに苦しみながら。

したがって、この混在的一者的な夜は、根源苦であるところの「黒化」、つまり小錬金術における「黒化」とも結びついているのである。

## 闇化としてのニグレド

しかし夜には、月も星も顔を出さない、完全なる闇夜もある。すべての存在が、闇に呑み込まれて消失する夜。そんなにも徹底的に“暗い夜”がある。

これこそは「黒い、黒きが上に黒い」夜である。黒を深めて“闇”に至った夜。大錬金術において“更新されたニグレド”を象徴する「虚無の闇夜」である。

そんな夜を表すものとして、日本語には「暁闇」という言葉がある。

一般には聞きなれない言葉かもしれないが、この暁闇とは、日が昇る間際の、最も闇が深い時間帯の夜のことを指している。

私の中では、この暁闇という言葉が最も、ニグレドの「闇化」のイメージに近いように思われる。

たしかに夜明け前、ふと空を見上げると、視界のすべてを、漆黒の闇が支配していることがある。

まるで、存在のすべてを呑み尽くしたような暗黒。そのままじっとしていたら、自分までが、虚無の世界に呑み込まれそうな暗闇。本当に深くて暗い闇。

暁闇とは、まさしく、そうした“虚無的暗闇”が浮かび上がる時間帯なのである。

ここでは太陽が完璧に、その影響力を失ってしまっている。つまり「太陽のアンチテーゼとしての夜」がここにはあるのである。

とはいえ皮肉なことには、このような深い闇夜を潜ってこそ、さしたる時を経ずして暁の瞬間が訪れることになる。その循環的な摂理を「暁闇」という熟語そのものが暗示している。つまり「暁に近い闇」として。

## 曙光と赤化

これまで「アルベド＝白化＝真昼の白日」「ニグレド＝黒化＝暁闇」と推定してきた。では、ルベドの「赤化」の場合はどうだろう？「赤化」を太陽に擬えるならば、それは、どのような太陽の状態を指すことになるだろう？

きっと読者にも察しが付いているだろう。答えは「曙光」である。夜の暗がりから、暁の赤い太陽が現れる瞬間の情景である。

この暁を迎えるために、私たちは、あの恐ろしい暁闇を経験しなければならなかった。

あの完全なる闇夜を通過しなければならなかった。輝く光というものは、決して光からは生まれず、ただ深い闇からのみ生まれるからである。

これは「創造の光を見るためには、暗闇の底で、いったん虚無を掴まなければならない」という事のメタファー（比喩）と言えよう。

そして、いつだって曙光は赤い色をしている。そう、暁の太陽は「赤い」のだ。私は、第1章で次のように語った。

私には、どうして〔錬金術の〕伝承が、それを赤いと言い残したのかが分かる。私が経験した、心的なるものとしての「賢者の石」は、まさに“赤かった”からである。

この枕詞を、今やっとな「本論」として昇華することが出来る。

見たまえ読者諸君らよ、虚無の暗闇から、存在の光が立ち上るのを。見たまえ諸君らよ、「無からの創造」の聖なる光を。

その光は、ヘルメス学の徒、錬金術師たちにとって、必然的に「曙光の隠喩」を背負っていた。だから、その情景は、あの朝焼けのように「赤い」と語られるのである。

## イエスの復活と曙光

曙光は「光の創造」である。と同時に、前日に夜に呑みこまれた太陽の「復活」でもある。つまり暁の光は、一度沈んだ太陽が、死の暗闇を通過し、朝になって甦ったことを物語っているのである。

あるいは、黄昏のうちに死んだ太陽が、暗黒の冥界を通過して、曙光として再生したと言ってもよいだろう。

そしてイエスは言った、「私は復活であり、命である（ヨハネ）」と。よって、暁の赤い光は、復活したイエスの命を象徴するものでもある。

そうであるならば、ここで二千年前のイエスの足跡に、これまでに語ってきた「色彩変化の寓意」を当てはめてみるのも一興だろう。

そうしてみると、まず“絶対の許し、救済”の表現である「十字架上のイエス」が、アルベド（白化）に当てはまるだろう。アルベドの倫理面こそは「母性原理による絶対の許し」であるからだ。

そして、その十字架上の死によって、冥府に降っていったイエスが、ニグレド（黒化）の象徴となる。このイエスの冥府行きは、正典の『ペテロの手紙』や、外典の『ニコデモ福音書』で触れられている。

残るはルベド（赤化）であるが、これには「死から三日後に復活したイエス」がピッタリと当てはまる。そのときイエスは、暁闇から甦った太陽のように復活したのである。暁の赤い太陽のように再生したのである。

そのせいか、復活のエピソードは、四つの福音書すべてが、朝の景色の中でそのストーリーを開始させている。それが史実であるから、というよりは、きっとそれが「赤い光の中で語るのが相応しい場面」であるからなのだろう。

マタイは「週の初めの日の明け方に」と言って——ルカは「週の初めの日の明け方早く」と言って——ヨハネは「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちに」と言って——復活のストーリーを語り始める。

中でも、これを最も簡明に書いているのがマルコで、彼は、「イエスは週の初めの朝早く、復活して、まずマグダラのマリアに御自身を現わされた」という、たった一文で、復活のストーリーをまとめてしまっているのである。





---

再臨のキリストによる福音書 3-IV

---

著 正道

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---